福知山市農委会

21組織の意見を集約！

来年度の農業施策を市長に要請

【京都】福知山市農業委員会は8月24日、市内の24５集落をカバーする21組織で構成する、地区営農推進協議会（地区推）の意見を集約し、同市の来年度予算編成に向け、大橋一夫市長に要請書を提出した。

同市では、地区推の会長に農地利用最適化推進委員が就任し、集落の農区長（＝農業委員会補助員）や農業委員と協力して「地域での話し合い」を推進。地区推が中心となって地域計画の実施状況を確認し、必要な更新（ブラッシュアップ）を行う取り組みを進めている。

このため、来年度に必要な施策として、「各地域の取組を支援する予算」や「地区推の機能強化に必要な活動費の支援」などを要望。併せて、集落営農組織や担い手農家の設備投資に対する支援、農業用施設や有害鳥獣対策施設の改修・修繕経費の支援など、農業関係予算の拡充を求めた。

施策改善に向けて農業委員会が意見を提出することは、農業委員会法第38条に基づく大切な業務であり、同市では、毎年、農業委員会の要請を考慮して翌年度の施策を検討している。（会沢仁史）



福知山市農業委員会の藤田会長（中央）と役員から、大橋市長（右から3人目）へ要請（8月24日）

青年委員奮闘中 ▷44

宇陀市　松田麻由子農業委員

【奈良】「女性や若手など、これから地域の将来を担う農業者に農地をつなぐ橋渡し役としての活動を積極的に進めていきたい」と話すのは、宇陀市で農業委員を務める松田麻由子さん（44）。

㈱ハンサムガーデンの取締役として、リーフレタスやサニーレタスなど約3・2㌶を周年で有機栽培するほか、耕作放棄地を活用した規模拡大や、研修生の受け入れに注力している。

松田さんは、2年前に農業委員の募集案内を見て、自身も地域の農地を守りたいとの思いから、地元の推薦を受けて、委員となった。

現在、土づくりの専門家「土壌医検定」の資格を持つ松田さんは、土壌病害の発生防止などの知識が役に立つことから、自ら勉強会を開き、若手を中心とした担い手の育成に尽力している。

「女性や若手農業者が気軽に相談できるような環境づくりを心掛け、新規就農者などの定着につなげていきたい」と意気込む。（木村将史）



耕作放棄地を活用した圃場でリーフレタスなどを有機栽培する松田さん

近畿

近畿総局
和歌山県農業会議

和歌山市茶屋ノ丁2番1
和歌山県自治会館6階
073・432・6114

滋賀県支局　077・523・2439
京都府支局　075・441・3660
大阪府支局　06・6941・2701
兵庫県支局　078・391・1221
奈良県支局　0742・22・1101

試食で自分好みの一房を

「試食しないと買えないぶどう直売所」スタート

柏原市　乾健裕さん

【大阪】柏原市国分東条町で「乾のぶどうガーデン」を営む乾健裕さん（43）はこのほど、購入前の試食を重視した「試食しないと買えないぶどう直売所」を本格的にスタートさせた。

「自分が買う立場なら味に納得してから購入したい」とかねてから実施していた試食サービスを、直売所のコンセプトとして前面に打ち出したもので、反響は大きく府外から訪れる客もいる。

約65㌃で有機系肥料にこだわりながら、デラウエアやシャインマスカット、ピオーネなど約30品種を生産。来店客に試食を通して甘みや酸味、香りなどの違いを確かめてもらい、好みに合ったブドウ選びを手助けしている。



「ほ場でブドウの味を確かめ、おいしいと自信をもって売り場に出しています」と乾さん

乾さんは代々続くブドウ農家の4代目。高校卒業後はお笑い芸人として活動し、30歳で家業に戻った。芸人時代に培った対話力も生かし、来店客にブドウの魅力を伝えている。

「多くの人に『柏原ぶどう』を知ってもらい、産地全体が盛り上がってほしい」と話す。（沼田湧悟）

果樹王国わかやまで生産者を支援

規格外品をジェラートに

有田市　もぎたてありだ

【和歌山】「一年中、果物を提供できるのは、和歌山の良いところです」と話すのは、㈱サカモトの代表を務める坂本孝利さん（47）。

県内の農業関連企業への出向に伴い、2018年4月に来県。さまざまな生産者と接する中で、県内農業の特徴を知るとともに、生産者が抱える多様な課題に気付いた。

出向終了のタイミングで長年勤めた農業関連企業を退職し、21年4月に独立。ドローンによる薬剤散布に加えて、規格外品を有効利用したジェラートを製造・販売する「もぎたてありだ」を24年2月に始めた。

ジェラートは風味が損なわれにくく、また賞味期限の設定がないため、農閑期の商談会でのPR商材として生産者が活用することにつながっている。

今後は「和歌山の食材を扱っている県外飲食店で、ジェラートを扱ってくれるようPR活動を広げたい」と坂本さんは語る。（鹿嶋俊宏）



㊤ジェラートは果物の品種や生産者の名前を記載して販売、㊧もぎたてありだのインスタグラム二次元コード

ニューファーマー New Farmer

農業ならではのときめき届けたい

ハプニング楽しみトマトと水稲栽培

甲賀市　植出奈緒美さん

【滋賀】「思い通りにいかないこともあるが、ハプニングも楽しみながら毎日農業に取り組んでいます」と話すのは、甲賀市でトマト9・8㌃と水稲50㌃を栽培する植出奈緒美さん（22）だ。

農業大学校卒業後、TOMIKAWA GREEN FARMでトマトとキュウリの栽培を学び、2025年4月に新規就農した。

就農のきっかけは、もともと好きだったトマトを通じて、「農業ならではのときめきを感じられる、思い出に残る場所を作りたい」と考えたこと。

今後の目標について、「観光農園やおしゃれな直売所のような、生産者の顔や加工の工程などを見ることができる場所を作りたい」と笑顔で話した。（福井かれん）



企業的経営感覚を備えた農業経営者へ

ひょうご農林機構

ひょうご農業MBA塾が開講

【兵庫】（公社）ひょうご農林機構は7月10日、神戸市で「ひょうご農業MBA塾」の開講式を開催した。同塾は、企業的経営感覚を備えた農業経営者の養成をめざして全13回の講義や現地指導を行うもの。

式は、同機構の多田勝利理事長のあいさつと、県農林水産部の菅村哲也部長の来賓あいさつで幕を開けた。

続いて㈱農林漁業信用基金の牧元幸司理事長が「今後の農政の展開方向について考える」をテーマに講義を実施した＝写真。牧元理事長は農林水産省農村振興局長や林野庁長官などを歴任し、兵庫県農政企画室長としての勤務経験もある。1926年（昭和元）からの100年間を振り返り、世界の食料需給や日本の農政の出来事などを説明。今後の農政の展開方向などをわかりやすく解説した。

開講式に出席した受講生からは「今後、加速的に農地が集まるので、生産性向上に対応した基盤整備が必要」などの提案が行われ、熱気あふれる中で同塾がスタートした。（山口昭彦）

